雑説

韓愈

作者

七六八年〜八二四年。中唐の文豪で唐宋八大家の一人。字は退之、諡は文公。河陽（河南省）に生まれる。一説に、鄧州南陽（河南省）の人。また、自ら遠祖の出を昌黎（遼寧省）と称していたことから、韓昌黎とも呼ばれる。幼くして父母をうしない長兄の韓会に養われたが、その兄も亡くなると兄嫁の鄭氏に養育された。貞元八（七九二）年、二十五歳で進士に及第し、その後しばらくは節度使の幕僚として各地を転々としたが、貞元十八（八〇二）年に国子四門博士となり、初めて正式に任官した。貞元十九（八〇三）年、三十六歳で監察御史となるも、京兆尹（首都長安の長官）である李実の悪政を弾劾したことから、陽山県（広東省）の令に左遷される。後に長安に戻り、国子博士・比部郎中兼史館修撰・考功郎中兼知制誥などを経て、刑部侍郎となった。しかし元和十四（八一九）年五十二歳のとき、憲宗皇帝が仏舎利を宮中に迎え入れようとしたのに「仏骨を論ずる表」をたてまつって反対したため、潮州（広東省）の刺史に左遷された。その後再び中央に戻り、国子祭酒（国立大学長）から兵部侍郎（軍事次官）、吏部侍郎（官吏任用の役所の次官）となり、長慶四（八二四）年に五十七歳で没した。この最後の官職によって韓吏部とも呼ばれる。

「李・杜・韓・柳」（李白・杜甫・韓愈・柳宗元）と併称されるほどの文章家である韓愈は、白居易と並んで中唐の代表的詩人だが、柳宗元らと共に六朝以来の四六駢儷文に反対し、漢以前の古文復興に努力したことが最大の業績とされる。また、「韓門の弟子」と世に言われるほど、友人門下を引き立て面倒をよくみた。李翺や皇甫湜などは韓愈の弟子として知られている。

著作は「昌黎先生集」四十巻がある。伝は、「旧唐書」巻百六十、「新唐書」巻百七十六に見える。

出典

唐宋八家文読本

清の沈徳潜（一六七三年〜一七六九年）の編。三十巻。乾隆四（一七三九）年成立。唐宋八大家の散文を集めたもの。古文の大家である、唐の韓愈・柳宗元、宋の欧陽脩・蘇洵・蘇軾・蘇轍・曽鞏・王安石の八人を並称して、唐宋八大家という。この書は、明の茅坤（一五三年〜一六〇一年）の「唐宋八大家文鈔」一六四巻及び清の儲欣（一六三一年〜一七〇六年）が増補して、八家のほかに李翺・孫樵を加えて著した「唐宋大家全集」と、八家それぞれの本集を綜覧して抜鈔したものである。沈氏は、毎編に評点、段落をつけ、総評を加え、前人の批評の妥当なものを取り、文中の記事に必要な参考資料を付録した。本教科書は、明治書院「新釈漢文大系　唐宋八家文読本一」（星川清孝・田森襄著）によった。

参考文献

❊ 教師用

「唐宋八家文　一」（中国古典選）清水茂　朝日新聞社　昭五十三

「研究資料漢文学6　文」渡辺英喜・田部井文雄・吉崎一衛　明治書院　平五

「唐宋八家文読本　一」（新釈漢文大系）星川清孝・田森襄　明治書院　昭五十一

❊ 生徒用

「漢文名作選4　文章」巨勢進・向嶋成美　大修館書店　昭五十九

「唐宋八大家文読本〈韓愈〉」（新書漢文大系）星川清孝　明治書院　平十八

「漢文塾　漢字文化の魅力上」田部井文雄　明治書院　平二十二

主題

一日に千里を走る名馬は、いつでも存在するが、それを見分けることのできる伯楽のような鑑定者は、いつも存在するとは限らない。このために、名馬もその能力を発揮できることなく、虚しく埋もれてしまっている。それなのに「天下に名馬無し。」とされるのは、まことにいたたまれない。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め～一五八・3〈不下以二千里一称上也。〉	千里を走る名馬は、伯楽によって見いだされる。名馬はいつもいるのに、伯楽はいつもいるとは限らないために、名馬と分からず平凡な馬並みに扱われ、能力を発揮することなく死んでいく。

第二	一五八・4〈馬之千里者〉～ 一五八・5〈不下知二其能千里一而食上也。〉	また、飼い主は名馬を、その能力を知らずに飼っている。
第三	一五八・6〈是馬也〉～ 一五八・8〈安求二其能千里一也。〉	その名馬は不当な扱いによって、十分な能力を発揮できないばかりか、平凡な馬と同じ程度の力すら出すことができなくなる。
第四	一五九・1〈策レ之〉～ 一五九・2〈「天下無レ馬。」〉	それなのに、名馬を見分ける力のない飼い主は、名馬を目の前にして「名馬がいない。」と嘆くのだ。
第五	一五九・3〈嗚呼〉～ 終わり	その状況に対して作者は嘆息する。本当に名馬がいないのか、それとも本当は名馬を正しく見分けられないのではないか、と。

訓読と現代語訳

【第一段】①世に伯楽有りて、然る後に千里の馬有り。②千里の馬は常に有れども、伯楽は常には有らず。③故に名馬有りと雖も、祇だ奴隷人の手に辱められ、槽櫪の間に駢死して、千里を以て称せられざるなり。

【第二段】④馬の千里なる者は、一食に或いは粟一石を尽くす。⑤馬を食ふ者は、其の能く千里なるを知りて食はざるなり。

【第三段】⑥是の馬や、千里の能有りと雖も、食飽かざれば、力足らず、才の美を見はすこと無きなり。

【第一段】①世の中に伯楽（馬の鑑定の名人）がいて、そうして初めて一日に千里を走る名馬が存在するのである。②一日に千里を走る名馬は、常にいるけれども、（それを見分ける）伯楽は、いつもいるとは限らない。③だから、もし名馬がいたとしても、（伯楽がいなければ、名馬としての本領を発揮できず）ひたすら身分の低い使用人の手で粗末に扱われ、かいばおけの間で（平凡な馬と）首を並べて死んで、千里の名馬とたたえられないで終わるのである。

【第二段】④馬の中で千里を走るものは、一食にひょっとすると穀物一石を食べてしまうこともある。⑤（ところが）馬を飼うものは、その馬の能力が一日に千里を走ることを知っていて飼うのではないのである。

【第三段】⑥（そこで）この馬は、もし一日に千里を走る能力があったとしても、十分に食べられないので、その能力を発揮できず、天分の優れていることが外に現れな

外に見れず。⑦且つ常馬と等しからんと欲するも、得べからず。⑧安くんぞ其の能く千里なるを求めんや。

【第四段】⑨之を策うつに其の道を以てせず。⑩之を食ふに其の材を尽くさしむる能はず。⑪之に鳴けども其の意に通ずる能はず。⑫策を執りて之に臨みて曰はく、「天下に馬無し。」と。

【第五段】⑬嗚呼、其れ真に馬無きか、其れ真に馬を知らざるか。

い。⑦そのうえ、普通の馬と同じ働きをしようとしても、その機会を求めることもできない。⑧（これでは）どうしてその馬に一日に千里も走るという能力を求められようか、いや、求められるわけがない。

【第四段】⑨馬を鞭打って使うのに、名馬を扱うのにふさわしいやり方を用いない。⑩（また）馬を飼うのに、名馬としての才能を発揮させることができない。⑪（馬が）飼い主に鳴いて訴えても飼い主の心中に伝えることができない。⑫（飼い主は）鞭をしっかり握って名馬を見下ろして、「天下に名馬はいない。」と言う。

【第五段】⑬ああ、そもそも本当に名馬がいないのだろうか、（それとも）そもそも本当は馬を理解していないのではないだろうか。

学習活動のポイント

導入

学習活動のポイント

❶ 中国の散文の特徴について理解する。

❶「散文」は、脚韻を踏まない文章であり、作家の思考や事実の記録などを行う普通の文章である。韓愈「雑説」は、唐代の古文復興運動を代表する優れた散文である。これらのことを、板書等で明示する。

《板書例》

○散文について

駢文

・字数を整え（四字と六字の組み合わせが多い）、対句を基本とする文章。四六駢儷体。
・六朝時代に発達し、唐代以降も形式を重んじる公的な文体として用いられた。
・「令和」の典拠となった「梅花歌序」（『万葉集』）もこの文体で書かれている。

古文

・字数を整えず、漢代以前の文章を手本とする文章。対句も用いるが、形式的になることは避ける。散文。
・韓愈や柳宗元によって作られ、事実の叙述（記事）や作者の主張（論説）に用いられた。
・形式よりも内容が優先されるので、文章を論理によって構成する意識が強い。

○古文の基本要素

・主張
・事例
・比喩
・読者への問いかけ・自己の感慨

「読者への問いかけ・自己の感慨」は最後に来ることが多いが、その他の要素の配置は自由。

展開

学習活動のポイント

❶ 韓愈について理解する。
❷「雑説」の構成と主張を理解する。
❸ 範読を聞いて、音読する。
❹ 正確な現代語訳をもとに、要旨をノートにまとめ発表する。
❺ 否定形・限定形・受身形・反語形・詠嘆形・疑問形を理解する。知技(2)ウ
❻「天下無レ馬。」の「馬」はどのような馬のことか考える。
❼「伯楽」「千里馬」「奴隷人」「常馬」は、それぞれ何を例えているか考える。
❽ 本文の構成を図にまとめる。思表判B(1)ウ〔「学習のポイント」1〕

❶教科書の作者紹介に加えて、六朝時代に隆盛した技巧中心の散文（駢文）の文体を改革し、内容のある文章を書くことを唱え、文章によって政治、社会の革新に貢献しようとしたこと、科挙試験に何度か落第し、官職については左遷され、立身出世までに韓愈は幾度かの曲折を経たこと、その苦労は彼の剛直な性格、意志の強さも影響したことなどについて簡単に紹介し、彼の文章の雰囲気をより身近に感じるための助けとする。

❷「雑説」についての解説（「学習のポイントの解答例」および「言語活動の解答例」）を参考に、寓話や逸話のように見えながら、実際は、世の中の現状に対する作者の主張・憤懣・感慨が述べられていることを説明し、「史伝」の単元で学んだ文章との違いを考えさせる。

❸範読を正確に聞き取らせる。注意すべき読みとして「伯楽不二常有一。」「祇辱二於奴隷人之手一」「不下以二千里一称上也。」「雖レ有二千里之能一」「安求二其能千里一也。」「嗚呼、其真無レ馬邪、其真不レ知レ馬也。」などがある。

❹予習の段階で書き下し文を書かせ、授業でその疑問点を確認するように指導する。正確な現代語訳をするために、「伯楽」「然」「雖」「称」「食」「能」「飽」「見」「等」「不レ可レ得」「策」の解釈に注意させる。授業終了後、ノートを提出させ、各自がまとめた要旨の内容を確認する。

❺「不二常有一。」（否定形）・「祇辱二於奴隷人之手一」（限定形）（受身形）・「安求二其能千里一也。」（反語形）・「嗚呼、其真無レ馬邪、其真不レ知レ馬也。」（詠嘆形）（疑問形）を理解させる。「句法」参照。

【評価】正確に書き下し文にできているかを確認し、漢文を読むために必要な訓読のきまりなどについて理解しているか、ノートや提出物などにより分析する。

❻文脈から考えさせ、一、二名に指名する。名馬を扱うのにふさわしいやり方をせず、その能力を発揮させられず、馬の気持ちも解さない飼い主が、名馬を目の前にして発した言葉であることから考えさせる。

❼諷喩文であることに注意して全体を読解し直し、それぞれ何を例えているかを考えさせる。有能な人材を「千里馬」に例えて

いることに気づかせ、推察させる。

《板書例》

●それぞれ何を例えているか

「伯楽」　―優れた人材を見抜き登用する名君・賢相。
「千里馬」―優れた才能のある人物。
「奴隷人」―人の能力を見抜く力のない下級官吏。
「常馬」　―才能のない並みの人物。

また、「駢二死於槽櫪之間一」「粟一石」の比喩するところもあわせて考えさせる。

❽「学習のポイントの解答例」1参照。

【評価】本文の構成について分かりやすく図にしてまとめ、本文の特徴を捉えているか、ノートや提出物などにより分析する。

■まとめ

学習活動のポイント

❶作者は「伯楽」や「千里馬」の話に例えて何を言おうとしているのか話し合う。思表判B⑴ア・イ　主態　**〔「言語活動」1〕**

❶誰を、何を批判しようとしたのかを考えさせる。導入で触れた彼の境遇などをあわせて考えるとよい。また、「世有二伯楽一、然後有二千里馬一。」についても考え、話し合わせる。

発問例

●一五八ページ

問 **「辱二於奴隷人之手一」（2〜3行目）とは、どのようなことか。**

答 身分の低い使用人に粗末に扱われるということ。

問 **「才美不二外見一。」（6〜7行目）とあるが、なぜか。**

答 名馬は一食で穀物一石を食べてしまうこともあるが、十分な食糧を与えられていないので、力を発揮できないため。

補 「馬之千里者…食不レ飽、力不レ足」（一五八・4〜6）から考えさせる。

語句の研究

●一五八ページ

説 文体の一種。比喩などによって自分の意見を述べた文。「雑説」は短編四種の総称で、これは第四「馬の説」。他は第一竜の説、第二医の説、第三鶴の説。

1伯楽 馬の鑑定の名人。姓は孫、名は陽。春秋時代、秦の穆公のときの人。馬の鑑定が巧みであったといい、「荘子」外編馬蹄第九「善く馬を治む」とある。天厩星の傍の伯楽星という天馬を掌る星が孫陽のあだ名となった。後に馬に明るい人をいうようになった。我が国で、牛馬の売買・仲介を業とする人を「ばくろう」（博労、馬喰）というが、これは「はくらく」の音の転じたものという。ここは人物を見抜く眼力のある名君・賢者の例え。

1然後 そののち、それからの意で、事柄や時間の前後関係を表す接続詞。

1千里馬 一日に千里を走るほどの名馬。唐代では「一里」は約五六〇メートル。後の「名馬」も同じ。ここでは才能の優れた人物を指し、暗に自分に充てている。

2雖レ有二名馬一 「雖」には、逆接の仮定条件と確定条件の意味がある。この部分を仮定条件ととると「もし名馬がいたとしても」となり、確定条件ととると「名馬がいるけれども」となる。「雖」の後に主語がある場合は逆接の仮定条件であることが多いため、前者の訳をとった。下文の「雖レ有二千里之能一」の用法も同じ。

2辱 自信や体面がくじけてがっくりする。台無しにされたつらさ。類義語の「恥」は、きまりが悪くバツが悪くて心がいじける、きまり悪い気持ちにさせる、の意。

2奴隷人 身分の低い使用人。下男。馬丁。無知な馬屋番人。ここでは暗に、雑務係の下級役人に充てている。

3駢死 （平凡な馬と）首を並べて死ぬ、の意。「駢」は漢音で「ヘン」と読む。二匹の馬が首を並べていることを表す。ここでは、優れた人材が埋もれたままで死んでいくことの例え。

3槽櫪之間 かいばおけの間。「槽」「櫪」は、いずれも、かいばおけ。一説に「櫪」は馬小屋の床板ともいわれる。ここでは、優れた人材が埋もれてしまっている場所の例え。

3不下以二千里一称上也 「以二千里一」は「称」にかかる連用修飾語。「以」は、「…で・…

●一五九ページ

問 ◉この「馬」（2行目）とは、どのような馬のことか。

答 名馬。

補 愚劣な主人が鞭を振り上げて、傲然と名馬の前に立ちはだかって言う言葉が、皮肉にも「天下に馬無し。」である。ここが全文中のクライマックスであり、無知な飼い主は戯画化されて嘲笑の的になる。続いて作者は「嗚呼」と泣き笑いの嘆息をもらしながら、「本当に名馬がいないのか、それとも全く名馬を名馬としてずばりと当てられないのか。」と、自分は一歩退いて、読者の決定に任せるという結び方をしている。

問 「嗚呼、其真無レ馬邪、其真不レ知レ馬也。」（3行目）とは、誰の言葉か。

答 作者。韓愈。

によって」という手段や原因・理由を示す前置詞である。つまり、「以二千里一称」は、「千里（の馬）という理由で称える」となる。文意上「称」は受身であり「称セラル」と読み、全体は「千里の馬と称えられないのである」となる。この「称」は、「ほム」「たたフ」の訓で読むこともできる。

4或 副詞。あるいは、ひょっとしたら。

4粟 小さくてぱらぱらした穀物。穀物の総称。稲やきびなどの外皮のついたままの実。

4一石 「石」は容量の単位。当時の一石は約六〇リットル。十分な俸給に例えられる。

7且 そのうえ。一説に「しばらク」と読み、「まあ、せめては…」の意を表すという。

●一五九ページ

1策レ之 「策」は動詞で、馬を鞭打つ、また鞭で打つように刺激を与える、の意。「策レ之」「食レ之」の「之」は馬を指し、「鳴レ之」の「之」は飼い主を指す。ただし、三つとも語調を整えるために置かれた語と解する説もある。

1其道 名馬を扱うのにふさわしいやり方。

1材 「才」と同じ。

1鳴 「鳴」の本義は、存在を告げる。ここでは馬が声を出す意味であるが、声をかすらせてなく意味の嘶（セイ）にあてて、「いななく」の訓で読むこともできる。なお、曹植「求二自試一表（自ら試みられんことを求むる表）」（『文選』巻三七）に「騏驥長鳴、伯楽昭二其能一（騏驥長鳴して、伯楽其の能を昭（あきら）かにす）」の句が見える。

2臨 高い所から下を見る。ここでは、名馬の前に傲然と立ちはだかって見下ろす。

3知 ずばりと当てる。本質を正しく見通す。感覚や判断、記憶などの働きを含む。

句法

伯楽不二常有一。 否定形。「不二常有一」は、「常有(ニ)リ」（いつでもいる）を否定した文で、「つねニハあラズ」と読み、「いつもいるとは限らない」の部分否定の意味を表す。これに対し、「不レ有(ラ)」（いない）の前に副詞「常」を付けた文「常不レ有」は、「つねニあラズ」と読み、「いつでもいない」の全部否定の意味を表す。

祇辱二於奴隷人之手一 「祇」は、「一筋に・ひたすらに」の意。限定形。「祇(ダ)……」の形で、「ただ……」と読み、「ただ……だけ」の意。「辱二於奴隷人之手一」は、「……(ラル)二於……一」の形の受身形。「……（ニ）……ラル」と読み、「……に……される」の意味。

安求二其能千里一也。 反語形。疑問詞「安」は「いづクンゾ」と読み「どうして」と理由を問い、文末の助字「也」と呼応している。反語形は、「どうして……しようか、いや、……しない。」と、疑問の形をとりながら、それとは正反対のことを強く表す言い方である。疑問形と反語形は、基本的に副詞（何・誰・安など）も助字（乎・邪など）も同じであるため、疑問形であるか反語形であるかは、文脈から区別する必要がある。

嗚呼 詠嘆形。「嗚呼……」の形で、「ああ……」と読み、「ああ（……だなあ）」の意。

其真無レ馬邪、其真不レ知レ馬也。 「邪」と「也」は、それぞれ文末に付いて疑問の意を表す助字。また「其」は、疑問・反語の文の述語の前に付けて強調の語気を表す助字である。二つの事柄をもち出し、その当否について強く問いを投げかけ、どちらかを選ばせる形。こうした表現では読者が後者を選択することを作者は予想、期待している。

鑑賞

この文は、馬を例えにして、世に優能な人材を見いだし、登用することのできる為政者がいないことを諷したものである。

「世に伯楽有りて、然る後に千里の馬有り。」何気ない書き出しであるが、これは全体の主旨であり、作者の主張を端的に表したものである。名馬というのは、伯楽がいてこそ初めて、その存在が認められる。有能な馬はいつでもいるのだが、ただ、名馬を見分けることのできる人物がいつもいるとは限らないのである。名馬を見いだせる伯楽がいなければ、名馬の存在は否定される。そして、名馬（有能な人材）はそれと知られず、奴隷人（素質を見抜く能力のない人物）によって飼われ、才能虚しく平凡な馬に埋もれて死んでいく（すぐれた才能を認められることなく、凡人と共に野に埋もれたまま虚しく死んでいく）。またその能力を発揮するのに必要な食糧、粟一石（十分な俸給と相応の地位）を与えられず、普通の馬（才能のない、並みの人物）程度の力も出せないでいる。そのような不当な扱いをしていたら、千里の能力を求めることなどできないのである。ここまで、文は論理的に明快に運ばれる。さらに作者は、「其の道を以てせず」「其の材を尽くさしむる能はず」「其の意に通ずる能はず」と、飼い主は名馬の調教の仕方を知らないで、その能力を十分発揮させることもできず、

馬の気持ちも理解できない、と一気に述べる。論をたたみかけることで文は勢いを増し、徹底的に、また露骨に、飼い主の無能さを指摘する。

ところで、本文を読んでいて、「千里の馬」「千里」「千里の能」という名馬を形容する語句が何度も出現することに気づくが、これについて頼山陽は、「千里馬の字が七たび見えているが、字句面を変えずに、そのまま使ったものは一度もない。しかも変わった跡に気がつかない。」という。また、この短文中に何度も同じ意味の語句を用いても、わずらわしく感じないのは、その変化の妙である、という意見もある。

作者がこれらの語句を再三登場させるのは、名馬の存在、有能な人物の存在を、文字の上においても顕示し、われわれに強く訴えかけたいがためなのではないだろうか。名馬は確かに存在するのである。

しかし、その名馬を目の前にして飼い主は、「天下に名馬がいない」と言うのだ。何という皮肉だろう。飼い主の無知・無能ぶりは、ここに露呈される。繰り返しされる名馬の存在の顕示は、飼い主の無知を決定的なものとし、情けないどころか、滑稽にすら感じさせるのである。最後に作者は、思わず「嗚呼」と声に出して嘆息し、皮肉を込め吐き出すように、われわれに問いを投げかける。読者の決定に結論を任せる形をとるが、彼の答えは初めから出ている。馬がいないのではない。それは、冒頭のフレーズ「千里の馬は常に有れども、伯楽は常には有らず。」へと通じ、無能な飼い主、つまり有能な人材を見いだすことのできない無能な為政者に対する嘲笑と共に、辛辣な批判となって結ばれる。見いだされない有能な人材には、おそらく自分自身も含まれていただろう。堂々と直截的に権力者への批判を著す彼の態度には、自己の主張に対する強い自信と気概を感じるのである。